
私立桜木坂大学附属高校

木立久美子

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

私立桜木坂大学附属高校

【Nコード】

N3291D

【作者名】

木立久美子

【あらすじ】

「変態生徒会長と俺」シリーズ番外編。基本的に1話完結の短編集みたいなものですが、たまに本編とリンクしてたりもします。暇つぶし程度にお読み下さいませ。(2/8:「鳴沢くん中学時代」を修正のため一時削除しました)

前書き

木立久美子が書いている「変態生徒会長と俺」というシリーズの番外編です。

（ネーミングセンスについては突っ込まないでやってください。ふざけた題名だということは作者も重々承知の上です）

基本的に1話完結で、本編に入りきらなかった小ネタや、過去話、季節物などを書いていこうと思います。あからさまにBLな話もあれば、ただの日常話だったり。いろいろです。

かなりの不定期更新。（ネタが浮かび次第どこ追加していく予定です）

本編を読まないと訳が分からないような表現多発。本編をご存じない方は、ご注意を。

登場キャラについては、桜坂女子高の皆さんとか、天宮兄弟とかの出現率が高くなると思います。変態生徒会長や、主人公の緒方遼平君の出番は本編より大幅に少ないものとお考え下さい。

（ただ、いつか2人の出会い編を書けたらいいな、とは考えております）

かなりまとまりのないお話になるとは思いますが、本編共々、皆様の良き暇つぶしになることを心から願います。

なお、読んでいる最中に胸の奥がモヤモヤしたり、気分が悪くなった場合はただちに読むことを中止し、窓の外に向かって腹の底から「くだらねー！」と叫んでください。医師の診察は必要ありません。

では、長くなりましたが、これで前書きは終了といたします。

あとはご自分の判断でお読み下さいませ。

それと、ついでに登場人物の詳細を載せておきます。

本編を読むのが面倒くさい方や、「キャラが多すぎてわけわかんねーっ！」って方は是非ご利用下さい。

<緒方遼平>
おがたしやうへい

桜木男子高校1年B組。スポーツ特待生。

属性はツツコミだが、けっこう鈍感な面もあり、ときどき天然ボケのような発言をかます。

本人いわく「平凡な顔立ち」らしいが、渡瀬や藤野たちには「すごく可愛い」と絶賛されていた。

執行部の策略にハメられて、自分の意思とは関係なしに次期生徒会長となってしまう。

現在は、渡瀬に追っかけまわされ、桐谷と天宮兄弟に苛められ、鳴沢に癒やされる毎日を送っている。

ひよんなことから渡瀬への恋心に気づいてしまっが、もとがノーマル思考なため、なかなか素直になれない。

<渡瀬透>
わたせとおる

桜木男子高校3年A組。生徒会執行部会長。昨年度は副会長だった。

驚異の体力と前向き思考を合わせ持つ、学園のアイドル。自称「王子」で、かなりの美形だが性格に難あり。

しかし遼平に対する恋心は本物らしく、「変態」「消えろ」と罵

倒されても絶対へこたれない健気な男。

嫉妬心が強く、たとえ相手が自分の友人（例：鳴沢）であろうとも、遼平に近づく男共には容赦がない。

昨年度の生徒会長である花瀬に憧れていたらしいが、それが恋愛感情だったのかどうかは不明。

基本的に人当たりが良く世渡り上手。本心を隠すのが得意で、外面の良さは桐谷と並んで天下一品。

その反動か、気を許した相手の前では駄々っ子のように振る舞うことも。

<桐谷宗吾>

桜木男子高校3年A組。生徒会執行部副会長。昨年度は書記だった。

渡瀬の親友であり、お目付役。優等生の仮面をかぶった腹黒大魔王。座右の銘は「俺が良ければ全て良し」

ただ、なんだかんだ言いながら面倒見は良く、身内の人間（特に渡瀬）のことは大切に思っている様子。

普段から暴走しがちな渡瀬に対し、お説教ができる唯一の人物である。

何事も自分の身内を最優先に考える節があり、親友のためなら後輩の1人や2人は平気で犠牲にする鬼悪魔。

ちなみに、桜坂女子校の藤野とは幼馴染みで、よく周囲に恋人同士だと誤解されてしまうほど仲が良い。

自分の家族についてあまり語りたがらず、特に姉の話になるとあからさまに機嫌が急降下する。

<鳴沢涼>

桜木男子高校3年A組。生徒会執行部書記長。昨年度は桐谷と同

じく書記だった。

渡瀬と桐谷の良き友人であり、執行部の良心。遼平には「唯一の常識人」と呼ばれ尊敬されている。

それゆえ渡瀬の嫉妬を買うことも多く（本人不本意）、普段からいろいろと損な役回りを引き受けている。

手先が器用で、資料作りや機械操作が得意。そのため、仕事の点においては桐谷から絶対の信頼を得ている。

実は遼平と同じスポーツ特待生。元サッカー部MFで、いろんな大学から勧誘が来ているらしい。

日々のトレーニングを欠かさない努力家であり、かなりの苦勞人。どれだけ振り回されても怒らない仏のような人で、最近遼平に親近感を覚えつつ心から同情している。

<天宮五月>
あみや いづみ

桜木男子高校2年C組。生徒会執行部会計長。昨年度は会計だった。

切れ長の瞳が印象的な、無気力系美少年。たまにロボットのような喋り方をする。

遼平をからかうとき以外は滅多に笑わず、基本的に無表情。極度の面倒くさがりでもある。

非常にマイペースな性格であるため、上級生の命令には従うようだが、それ以外は他人に無関心。

しかし、双子の弟である皐月に対しては別なようで、普段からいろいろ世話を焼いている。

基本的に皐月のお願いなら何でも聞くが、女装プレイだけは断固拒否。

高月鈴子とは、皐月ともども昔なじみらしいが、互いにあまり好意的ではない様子。

<天宮臯月あまみや はしづね>

桜木男子高校2年C組。生徒会執行部議長。昨年度は五月と同じく会計だった。

無気力系美少年その2。性格はやや子どもっぽく、よく兄の五月に甘えるような言動をする。

五月に対する依存と独占欲は相当なもので、もはやブラコンと呼べるようなレベルではなくなっている。

真偽の程は定かではないが、兄と2時間以上ひきはなされると禁断症状が出るらしい。

本人いわく、「俺と五月がトイレ以外で離れ離れになるなんて有り得ない」んだとか。

中学時代は陸上部で大会新記録も出していたが、面倒くさがりなので長く続かずやめてしまった。

執行部に入った動機は、「五月が入るって言ったから」。

<藤野宮子ふじの みやこ>

桜木女子高校生徒会長。3年生。副会長の高月鈴子を本当の妹のように可愛がっている。

フランス人形のような容姿をしており、日本人離れた美貌の持ち主。

母親は北欧の血をひいた日系人で、父親は元ヤクザという、少し変わったお嬢さま。

昨年度も生徒会役員をしていたので、運営にはそつがなく、周囲の信頼も厚い。

が、同時にかなりのBL好きでもあり、美少年同士の絡みにどうしようもない胸の高鳴りを覚えてしまう。

腐女子同盟である「乙女会」の幹部も務めており、しばしば鈴子に命令して萌え写真をゲット（盗撮）させている。

桐谷のことは、家族と同列に並べるくらい大切に想っているが、別に恋仲になりたいわけではない。

<高月鈴子>

桜坂女子高校生徒会副会長。2年生。藤野宮子を「お姉さま」と呼び心から慕っている。

黒髪ポニーテールがトレードマークの、可愛い女の子。

だが中身は藤野と同じくヘヴィな腐女子。興奮すると、たまに性格が変わったりするおいしいキャラ。

カメラを常備しており、美少年同士の絡みをすかさずフィルムに収める凄腕の持ち主でもある。

物腰が柔らかく、今時の女子高生には珍しい「〜ですわ」口調。

遼平に好意を持っており、それゆえ渡瀬との仲を応援している。ぶつちやけ「早くヤツちやえ」とか思ってる。

天宮兄弟とは中学生のころ面識があったらしいが、正直言ってあまり良い印象は持っていない。

<竹下洋司>

桜木男子高校1年B組。遼平の友人で、学年委員会と放送部に所属している。

同性愛者に対する偏見は無く、自分の考え方や価値観をちゃんと持っていて、歳の割にはしっかりした子。

渡瀬や桐谷、鳴沢など、執行部の上級生メンバーに対しては尊敬の念を抱いており、その命令にはとても従順。

生徒会のためならば、クラスメイトだろうが友人だろうが平気で裏切るほどの忠誠心を持つ。

だが、遼平と仲良しであるがゆえに、渡瀬にはあまり快く思われていない。

<花瀬^{はなせ}>

桜木男子高校卒業生。昨年度の生徒会長。明るく社交的な性格だったらしい。

全校生徒の憧れの的だったが、ある事件が原因で生徒会を辞めさせられてしまった。

なぜか遼平とよく似た顔立ちをしており、竹下に「緒方の兄貴かと思った」と言われるほどである。

好きなものは綺麗な女の子。苦手なものは腹黒モードの三杉。

<三杉^{みやま}>

桜木男子高校卒業生。昨年度の書記長。生まれつき体が弱く、物静かだが、よく笑う人だった。

事件の後、生徒会を辞めてしまった花瀬や、残された渡瀬たちのことを一番心配していた。

友達思いで後輩思いの優しい人。だが、その儂げな印象とは裏腹に、中身は誰よりも男前。

中学・高校を主席で卒業するほどの頭脳を持つ。ときどき腹黒発言も飛び出す。本人は無自覚らしい。

天宮兄弟とは幼いときからの知り合い。特に五月と親しく、よく助言を与えたりしてやっている。

生徒会関係者の中では、ヒエラルキーの頂点に限りなく近い御方。

<相沢^{あいざわ}>

桜木男子高校卒業生。昨年度の会計長。寡黙で冷静な傍観者タイプ。

少し責任感が強すぎる面もあり、何でも1人で解決しようと悩み

を抱え込んでしまう。

学生時代から、なぜか三杉には頭が上がらなかった。

事件のとき花瀬や駿河を止められなかったことを、いまだに悔やんでいるらしい。

< 駿河すまが >

桜木男子高校卒業生。昨年度の議長。悪戯好き。かなり短気で、熱しやすく冷めやすい直情型。

事件前までは、花瀬と共に生徒たちから英雄扱いされていたが、事件後は同じく生徒会を辞めさせられた。

相沢や花瀬と同じく、三杉には頭が上がらない。特に腹黒モード時は一種の恐怖心さえ覚えている。

事件当時、自分のせいで女の子がケガをしたのだと自責の念に駆られ、その後ほとんど学校へ来なくなった。

< 渡瀬重之わたせしげゆき >

桜木男子高校の校長先生。御歳67。ちなみに、本編では名前は出てこない。

二面性があるらしく、普段は物静かで非常に厳格なのだが、一度ネジが緩むと、どこまでも突っ走ってしまう。

実は、渡瀬透の祖父。身体能力抜群のスーパーおじいちゃん。

< 石川くんいしかわ >

桜木男子高校2年C組。よく名前を間違えられる。「かわいそう」の代名詞。

双子の幼稚園時代

天宮さんの家には、五月くんと皐月くんという、双子の男の子が
おりました。

2人はとても仲が良く、毎日ずっと一緒に遊んでいました。トイ
レ以外で、2人が離れることはありませんでした。

「ねー、いつき」

「なーに、さつき」

「おうちのまえに、ねこがいたよ」

「ねこ？」

「うん。くろくてしろいやつ」

「なーに、それ。くろいの、しろいの、どっちなの？」

「うんとねー…からだはしろいけど、しっぽはくろかったよ」

「へんなのー」

幼稚園から帰ってきて、2人で手洗いうがいをしているときのこ
とでした。

弟の皐月くんが、窓の外に一匹の猫さんを見つけました。

猫さんは、ちらつと皐月くんたちの方に顔を向けたかと思うと、
すぐに走り去ってしまったのです。あ、と思った次の瞬間には、猫
さんの姿は茂みの中へ消えていました。かなり、すばしっこいやツ
です。

ああ、五月くんにも見せてやりたかったのに、と皐月くんは溜め
息をつきました。

皐月くんは、お兄ちゃんである五月くんのごことが大好きでしたか
ら、いつだって同じものを見て、同じことを感じていないと、なん
だか寂しいような気持ちになってしまふのです。

臯月くんは、隣にいるお兄ちゃんの袖を、くいくいと引っ張りま
した。

「ねえねえ、いつき。さっきのね」「さがしにいじゅうっ」

「えー、でも、なんかめんどい」

「めんどいけど、さがしにいじゅうっ」

「さつき、いききたいの?」

「うん。いきたい。いつきといっしょに、あのねこであそびたい」

「…どうしても?」

「うん、どうしても」

「わかった。じゃあ、いじゅう」

2人は手を繋いで玄関へ行き、先ほど脱いだばかりの靴をもうい
ちど履き直しました。

「あ。」

「どうしたの、いつき」

「おやつ、たべるのわすれてた。もう、さんじはんだよ。おなかが
へってしんじゅうよ」

「しないよ」

「でも、おなかとせなかがくっついちゃう」

「くっつかないよ。おやつぐらい、いっかいくらいぬいてもへいき
だって」

「でも、きょうのおやつは、さっきのすきなあっぶるばいだよ?」

「…」

「…」

「…かえってきてから、たべよう」

「そうだね」

気を取り直して、2人はよっこらしよと立ち上がりました。2人

のお父さんが、立ち上がるときいつも「よっこらしょ」と言っている
ので、2人はそれを真似するのが癖になってしまったのです。
お母さんはそれを見るたびに、「おやじくさい幼稚園児ねえ」と、
呆れたように笑っていました。

「あ。」

「…こんどは、なに」

「おかあさんに、いつてきますをいわなくちゃ」

「えー？」

「おやのひとにだまって、かってにそとへでちゃだめだって、せん
せいもいつてたじゃん」

「えー…」

「いわないと、おかあさんにしんぱいされるよ」

「されてもいいじゃん、べつに。ははおやは、ごどもをしんぱいす
るのがしごとなんだよ」

「でも、いわなかったら、どうしていわなかったのって、あとでお
こられるよ？」

「…」

「…」

さすがお兄ちゃん。五月くんは、なかなかお利口さんです。

やがて臯月くんも、わかったよ、と素直に頷きました。

「…いつてきまーす」

元気よく…はありませんでしたが、2人はちゃんと「いつてきま
す」を言ってから家を出ました。

ぎゅっと手を繋いで、2人はとことこと歩き出します。さあ猫さ
んはどこにいるのかな、と周りをきよるきよるしながら、五月くん
と臯月くんは、おうちからどんどん離れていきました。

…あれ？ でも、ちょっと待って？
2人の言った「いつてきます」「は、ちゃんとお母さんに届いていたのでしょうか…」。

「ねー、いつき」

「なーに、さつき」

「ことばはひとつたわってはじめていみをなす、ってどうい
み？」

「…なにそれ。もしかして、このあいだの、てねびのはなし？」

「うん、そう」

「知らないよ、ぼく」

「うん。ぼくもしらない」

「…」

「…」

「じゃあさ、どーでもいいことなんじゃない？」

「そうだねー」

「ねー」

…言葉は他人ひとに伝わって初めて意味を成す。

2人は、それを理解するには、少し幼すぎたようですね。

先ほどの「いつてきます」が、台所の奥でお仕事をしていたお母さんの耳には届かなかったということにも、2人は気づいていない
のでした。

ああ、哀れなお母さん。いきなり消えてしまった2人の息子を、
今頃は慌てて探しているに違いありません。

そんなことを知るよしもない五月くんと臯月くんは、2人仲良く、
日が暮れるまで猫さん探しを続けてしまっただけでした…。

||
||
||
||
||
||

その日の晩。

怒ったお母さんにアップルパイを取り上げられてしまった双子が、押し入れの中で互いを淡々と慰め合っている姿を、会社から帰ってきたお父さんが発見しました。

常識人達の苦悩。(前書き)

遼平と鳴沢。それと双子メイン。
学園祭準備期間のときの話だと思ってください。

常識人達の苦悩。

オレが桜祭の実行委員になってから、数日が経った。

今日の部活は休みだったので、放課後は生徒会室で執行部の手伝いをしなければならぬ。

学年委員会の顧問に呼び出されたという竹下と教室前で別れて、オレは溜め息を呑みこみながら生徒会室へ向かう。これ以上、幸運を逃がしてたまらんか。

ガラッと扉を開くと、書記長の鳴沢先輩がオレを笑顔で迎えてくれた。

「よっ、緒方」

「ちわーっす」

思わず部活のときと同じノリで挨拶をしてしまう。

でも、鳴沢先輩も体育会系出身なので特に違和感を感じなかったらしく、ただ少し懐かしげな顔で目を細めていた。

…そっか、最近は忙しくて、あんまり部活の方に顔出せないんだもんな。

カバンを下ろしたオレは、ふと気がついて目を瞬いた。

「あれ？ 今日は何んだか少ないですね」

中を見渡すと、オレを含めて4人しかいない。

渡瀬会長と桐谷副会長の姿が見えなかった。（ちよっとホッとする）

「2人とも、職員室に呼ばれてるんだ。いろいろと打ち合わせもあるからな」

「そうなんですか……ん？」

ふと目をやった先に、なんだか不思議な物を見た。

鳴沢先輩の隣のデスクで、双子の片割れ（たぶん五月先輩）が電卓を片手に何やら計算をし、もう1人（皐月先輩）がその背中に負ぶさるような形で手元をのぞきこんでいる。まるで抱き人形だ。

ここは突っ込むべきか否か。

少し迷った後、オレはおそろるおそろる声をかけた。

「あの……」

「何」「

間髪入れずに、ぶっきらぼうな返答。

めげずにオレは言葉を継いだ。

「ちょっと聞きたいんですけど……先輩、一体なにやってるんですか？」

「見て分かんないの。桜祭経費の計算だよ」

「いえ、五月先輩のことではなくて。……皐月先輩、なにやってるんですか？ そんなに引つ付けてたら、五月先輩の邪魔になるんじゃない……」

「余計なお世話だよ、緒方遼平。俺と五月は一心同体なんだから大丈夫だよ」

「……そうですか」

何が大丈夫なのかは知らないが、五月先輩が何も言わないところを見ると、本当に大丈夫なのだろう。きつと。

すすごと戻ってきたオレを見て、鳴沢先輩が笑った。

「あの2人がああして引つ付いてるのは、いつものことなんだよ。ホント異常なくらい仲が良いんだよなー、あいつら」

「い、いつものこと…ですか」

「うん、いつもあんな感じ。まっ、最初のうちは気になるだろうけど、慣れればどうってことないからさ」

「はあ…そうですか」

長身の男子高校生が、同じく長身の男子高校生（しかも顔まで全く同じ）に甘えている姿は、オレから見ればものすごく異常な光景に思えるのだけど、鳴沢先輩はそうでもないらしい。

…慣れっすげえ。

「ところで緒方、これ。1年B組の模擬店の場所が決まったから、またクラスに知らせといてくれ。それとこっちが、今日の分の仕事な。もし誤字脱字があったら、こっちのシールで修正を頼む」

「あ、はい。わかりました」

とりあえず、仕事を終えなきゃ帰れない。

（いや、鳴沢先輩は帰してくれるだろうけど、きちんとやらないと後で桐谷先輩が怖い）

オレは鳴沢先輩から必要な書類を受け取ると、さっそく仕事に取りかかった。

数十分後。

書類と睨めっこしていると、どうしても集中力が途切れがちになつてくる。

（渡瀬会長たち、まだ帰ってこねーのかな…）

そんなことを考えながら、無意識のうちにフツと扉の方へ見やつた次の瞬間、オレはハツと慌てて目を伏せた。

（バカ！ なに考えてんだオレ！ あんな変態野郎なんか帰ってこない方がいいに決まってるじゃん！）

なんだか自己嫌悪。

いつのまにか手が止まってしまつて、そんなオレを見た鳴沢先輩が「ちよつと休憩しようか」と言ってくれた。

「なんか飲む？」

「あ、い、いいえつ。お構いなく…」

「遠慮するなよ、次期生徒会長」

「そーそー。こういうときは素直に甘えとくもんだよ、次期生徒会長」

「ちよつ、五月先輩つ、臯月先輩つ！ 重いです！」

いつのまにか背後に来ていた双子が、ずしつとオレに乗っかってくる。

べしゃつと机の上に押しつぶされながら、オレは横目でめいっばい2人を睨んだ。

「それに、その“次期生徒会長”っての、やめてください。オレはまだ選挙に出るとかそういうこと考えてないし…」

言いかけて、ふと思いつく。

「何？」

急に抵抗をやめたオレを見て、双子が怪訝そうな顔をする。オレは、いや、と軽く首をひねりながら呟いた。

「そつえば…どうして“オレ”なんだろう」

その呟きを聞き取った双子が、あからさまに「はあ？」「って顔をする。（オレからのアングルじゃよく見えないけど）

「緒方、まだそんなこと言ってるのー？」

「言ったじゃん。後継者が必要だから、執行部会議で決めたことだ、つて。ねー」

「ねー」

「いえ、ですから、そつじゃなくて」

とにかく退いてください、と肘で2人を押し返してから、オレは小さく息をついた。

「後継者が必要なのは分かりました。でも、なんでいきなりオレが“次期生徒会長”なんです？」

「「？」」

「別にオレじゃなくても、天宮先輩たちがやればいいじゃないですか。まだ2年生だから、来年度もあるんだし」

「あー…」

「新参者のオレが選挙に出るよか、ベテランの五月先輩や皐月先輩が次期生徒会長になる方が、よっぽど自然だと思えますけど？」

それは素朴な疑問だった。

ずっと考えてはいたんだけど、実際に尋ねてみたのはこれが初めてだ。

何も、オレが生徒会長にならなかつたって、来年度は双子のどちらかが会長をやればいいんじゃないか、と。

いくら後継者不足だからって、2年生を差し置いていきなり1年坊主をトップに立たせようだなんて、ちよつと納得がいかない。

そうやってふと視線をはずしたら、なんともいえない微妙な表情で微笑（…いや、苦笑か？）している鳴沢先輩と目が合った。なんなんだ、一体。

「鳴沢先輩…？」

「あー…そのことなんだけどな、緒方。俺達も、それを全く考えなかつたわけじゃないんだ」

「え？」

「とりあえず、緒方を書記か会計として執行部に入れておいて、来年度の生徒会長と副会長は双子に任せよう、って案もあつたんだよ。最初はな」

「じゃあ、なんで」

「…本人ふたしが嫌だって言い出したんだ」

「はいッ!？」

バツと振り返って天宮兄弟を見た。

五月先輩が、けろっとした顔で口を開く。

「だって、なんか面倒くさいじゃん、会長とか」

「め、面倒くさいってアンタ…!」

じゃあどうして会計長なんかやってるんですか、という至極当然なオレの問いかけに、五月先輩は眉ひとつ動かさずにスツとそっぽを向き、相変わらず彫り人形のような無表情でこう言った。

「俺、昔から数学だけは得意でさ。計算とかするの、けっこう好きなんだ。だから会計」

「はあ?」

「執行部には、当時の生徒会長に誘われたから入っただけだもーん」

「じゃあ臯月先輩は」

「俺は、五月が入るって言ったから入っただけだもーん」

「…さいですか」

がつくりと肩を落とすオレを慰めるように、ポンポン、と頭の上に手を置いて鳴沢先輩が苦笑した。

「な？　こんな奴らに生徒会を任せるよりは、緒方みたいな真面目な人間が会長をやった方がいいだろう？」

「別に：オレは真面目でもなんでもありませんけど…」

ただ、双子が不真面目すぎるだけだと思います。

そう呟いたオレの言葉を、鳴沢先輩は否定できずに目をそらした。

「あー、ひつどいなあ緒方！。まるで俺達が悪いみたいな言い方！」

臯月先輩が、五月先輩の肩に腕を回しながらダラダラした口調で言った。

五月先輩も「そーだそーだ」と同調している。相変わらず2人も口ポットみたいなの喋り方だ。

「・・・」

オレはそれを横目で数秒間見つめた後、溜め息を吐きながら鳴沢先輩と顔を見合わせた。

「…苦労しますね」

「…お互いに、な」

慰め合うように、2人で弱々しい微笑みを交わす。

横で双子がぶーぶーと文句を言っているが気にするもんか。勝手に言ってるこんにゃろめ。

つまり、あれだ。オレが今、次期生徒会長になるだのならないだのという面倒くさいことに巻き込まれている直接的な原因を作ったのは、双子たちなわけで。でも、一番最初にオレを後継者にしたいと言い出したのは渡瀬会長で。それに賛成して計画を無理やり押し進めたのは桐谷先輩で。だけど、裏で糸を引いていたのは渡瀬会長だし、桐谷先輩も双子もその意思に従ったわけだから……あー、こんがらがってきた。

まったくもう。一体、誰を恨めばいいのやら。

ガラッ。

「ただいまー！ あつ、遼平がいるー！ りょーうーへーいー」
「こら透！ まだ今日のノルマ終わってないぞ。オモチャで遊ぶのは後にしろ」

暫くして帰ってきた変態生徒会長と腹黒副会長を見て、オレと鳴沢先輩はもう一度目を合わせて苦笑した。

常識人達の苦悩。(後書き)

桐谷先輩、ナチュラルに遼平を「オモチヤ」呼ばわり。

裏・24話（前書き）

本編24話後の、桐谷と藤野さんのお話です。

大通りを外れ、閑静な住宅街に入る。ざわめきは遠くなり、見慣れた家並みの中をのんびりと歩いた。秋の夕暮れはつるべ落としのようだと、昔の人はよく言ったものだ。確かに、あつという間に日は沈んで、その残滓ですら消えてしまった。今夜は月が見えないから、星が瞬く弱々しい光と街灯以外は、足下を照らす光さえない。

2人きりで歩くのは久しぶりだった。

高校に入ってから互いに忙しく、昔のように頻繁に会うことは出来なくなっていた。それを寂しがるような関係ではなかったが、やはり幼馴染みというのとは一緒にいると安心するものである。気心が知れた相手だから、無理に自分を作ること、愛想笑いも必要ない。もう、ほとんど家族のような感覚だった。

「宮子」

名を呼ぶと、彼女はのんびりと振り向きながら「なあに」と応えた。穏やかで甘い女の声だ。

首を傾げた拍子に、色素の薄い髪がふわりと揺れる。

日も沈み、すっかり暗くなった夜道であるというのに、その表情はハッキリと認識できた。大人しそうに見えて、どこか計り知れない微笑み。大抵の人間は、彼女のこの容姿に騙されてしまうのだ。まったく、猫かぶりもここまでくれば上等だと思う。

一瞬のうちにそんなことを考えながら、桐谷は小さく溜め息を吐いた。

「お前、初対面から羽目を外しすぎだぞ。緒方に余計な警戒心を抱かせるな。後々やりにくいだろうが」

「ああ。そのこと？」

肩を揺すって笑うと、宮子は上機嫌でくるりとターンした。

セーラーカラーが翻り、ほっそりした頬を街灯が照らす。

「いいじゃない、別に。ファーストコンタクトこそ大切なよ。変

に取り繕って、後で本性がバレたら厄介でしょう?」

「最後まで隠し通せ」

「無茶言わないで。あんな可愛い男の子を前にして、私が萌えを押しさえかれるわけじゃないじゃないの」

「…いつも思うが、難儀な性癖だな」

「あら、そんなことないわ。腐女子の人生もなかなか楽しいわよ。どうして宗吾はこの良さが解らないのかしら」

「解ってたまるかそんなもの」

「まあ残念だわ」

全然そうは思ってたなさそうな口調で言うと、宮子はするりと桐谷に腕を絡めてきた。女が恋人に対してするような、可愛い動作ではない。まるで獲物を逃がさんとする毒蛇のようだと、桐谷は至極真面目にそんなことを考えた。

となると自分は何なのだろう。カエルか。ネズミか。どちらにする良い気分ではない。

「あなたは人間よ」

まるで桐谷の考えを読み取ったかのように宮子が言った。

少し驚いて相手の顔を見やると、焦げ茶色の瞳がまっすぐにこちらを射抜いていた。夜道の中に、少女の目だけが妖しく光る。まるでホラーだ。

「だからね、考えを全て隠し通せるだなんて思ってはダメ。人間は完璧じゃないわ。誰であろうと、いつかボロが出る。あなたも例外じゃないのよ、宗吾」

「何が言いたいんだよ」

「不安なら不安だと、そう言えばいいのよ」

「は…?」

思いがけない言葉に桐谷が眉を寄せると、宮子は腕に力を込めた。ぐいっと、桐谷を引き寄せながら再び口を開く。

「怖いんでしょう」

「何が…」

「去年のようになるんじゃないか、って。今年の桜祭を、本当に成功させることが出来るのか、って。他の誰は騙せても、私は絶対に騙されないわよ。何年一緒にいると思っっているの」

「バカなことを」

腕を振り払った。女相手に少し乱暴すぎる動作だが、構うことはない。相手は宮子だ。

桐谷は歪んだ表情を隠すかのように、そのままスタスタと歩き出した。

「待ちなさい、宗吾」

置いて行かれそうになった宮子が、慌ててパタパタと駆け寄ってくる。

隣に並び、小さく息をついた彼女は、どこか不機嫌そうに桐谷の横顔を睨め付けてきた。

「ひどい人。か弱い女の子を、こんな夜道に置き去りにしようとするなんて」

「お前はか弱くないだろう」

本心から桐谷はそう言った。宮子ほど暗闇が似合う女はいない。友人達にはよく「お前は腹黒だ」と揶揄されるが、冗談じゃない、彼女に比べればかわいいものだと思っただけ。上には上がいるのだ。正直言つて、桐谷は宮子に勝てた試しがなかった。今さら悔しいとも思わない。得てして男は、口では女に勝てないのである。桐谷は、それを充分すぎるほど知っていた。

「ありがとう、送ってくれて」

「いや」

やがて家に着き、門柱のところまで2人は別れた。会話もそこそこに素っ気なく立ち去ろうとする桐谷の背中へ、宮子は「宗吾」と彼の名前を呼んだ。

怪訝そうに振り向いた幼馴染みの顔を見て、彼女はひどく愉快そうに笑う。

そして言った。

「安心して頂戴。今年は、去年のようにはならないから」

「…何を根拠に？」

「愚問ね。私を誰だと思っているの」

クスクスと、少女の微かな笑い声が夜風に乗って流れてきた。秋も半ばの、少し冷たい風だ。ぞくりと悪寒を感じたのは、多分そのせいなんだと桐谷は思うことにした。

「ねえ、宗吾」

宮子が桐谷の名前を呼ぶ。甘ったるい、女の声だ。

傍目には高校生同士のカップルが、別れを惜しんでいるようにしか見えないだろう。なんて滑稽だろうと桐谷は拳を握りしめた。そんな可愛らしいもんじゃない。

黙りこくっている幼馴染みに何を思ったのか、宮子は小さく肩をすくめた。

「たまには、自分の本心をさらけだすのも、悪くないんじゃないかと思うわ。あなたはいつも隠してばかり。いいかげん限界が来るんじゃない？」

「…何が言いたい」

「渡瀬君のことが好きでしょう？」

思わず、門柱の角に頭をぶつけそうになった。

「何でそうなる」

「去年の事件で、誰よりも傷ついたのはきつと渡瀬君だわ。彼、花瀬さんに憧れていたんだもの。大好きだった先輩がいなくなつて、さぞかしショックだったでしょうね。もしも、また今年も同じようなことが起きれば、彼は去年よりもっとと傷つく。…桐谷、あなたはそれを見たくないんだわ。大切な人が傷つくのを見たくなくて、だから不安になつているのよ。違う？」

「くだらない」

吐き捨てるように呟いて、再び宮子へ背を向けた。もう振り返るつもりはない。

最後に冷たい一瞥をくれてから、桐谷は冷静な表情でこう言った。
「また、お得意の妄想か？ 悪いが俺は、そんな話に付き合ってもやれるほど暇じゃない。お前も解っているだろう」

「…」

「じゃあな。さっさと寝ろよ」

ひらっと一回だけ手を振って、桐谷は隣の家へと入っていった。とうとう一度もこちらを見ずに、ぱたんと後ろ手に扉を閉めてしま

う。
その姿を見送って、宮子は小さく溜め息を吐いた。夜闇の静寂に、その微かな音はゆっくりと紛れ込む。

少女は密やかに、「ばかな人ね」と呟いた。

やさしいひと。(前書き)

三杉さん登場。

双子の中学生時代のお話です。

思春期ゆえ、五月がちよつと不安定になっています。

でも、この話があったからこそ、今の天宮兄弟があるのだと思います。

やさしいひと。

「…え？ 皐月、陸上部やめたの？」

五月は思わず目を見開き、視線を数学の参考書から外して弟の方に向けた。

それは、中学2年の冬だった。一月の末の、ちらちらと雪が舞う寒い日のことだった。

暖房の前に陣取り、漫画をパラパラとめくりながら、弟の皐月は事もなげに「うん」と頷いた。

「昨日、退部届出した」

「どうして」

「どうして、って…。そりゃ、めんどかったからに決まってんじやん」

皐月は怪訝そうに眉を顰めながら顔を上げた。

なんでお前がそんなことを言うんだ、と言わんばかりの表情だ。

たぶん自分も同じような顔をしているんだろうかと、五月は鏡を見るような心地で緩やかに首を傾げた。

「…顧問は承知したの」

「さあ。でも、俺には関係ないし」

「受理してくれないかもよ、退部届。あの人、皐月のこと才能あるって褒めてたし…簡単には諦めないと思う」

「いいよ、別に」

向こうが諦めるまで、無視しつづけなければいいだけの話だ。

淡々とした声音でそう告げて、皐月はゆっくりと腰を上げた。ゆっくりと歩き、机に向かう兄の背後へ移動して、その首に腕を絡める。背中に感じる弟の体温に、五月は目を細めた。頭がおかしくなりそうだ。

$y = ax + b。$

aは変化の割合、bは切片。

まるで、わけのわからない呪文のよう。ちつとも頭に入らない参考書を前に、五月は勉強を続ける振りをして、静かに口を開いた。

「…臯月、陸上、嫌いだったの」

その問いに、背後の弟は身じろぎした。

「んー…わかんない。でも、少なくとも練習は好きじゃなかった。なまけると怒られるし、走りたくなくても走らなきゃいけないし、疲れるし」

「そう」

「それに、五月と一緒にいらなくなる。…練習なんかよりも、五月と一緒にいたい。五月の傍がいい」

「…そう」

五月は、苦々しい感情をゆっくりと飲み込んで目を伏せた。

…陸上は、ずっと面倒くさがりだった臯月が、はじめてやり始めたスポーツだった。もちろん自分からやると言い出したわけではなく、周囲に勧められて始めただけだったが、それでも進歩は進歩なのだ。大会新記録を出し、冬休み中も毎日のようにトレーニングに出かけていた弟の姿を、五月は少し誇らしく感じていた。なのに。

「俺はもう走らない」

事もなげに、弟は言う。

「面倒くさいよ。嫌になっちゃった。応援するから頑張っつてねとか、お前なら出来るとか、次の大会も期待してるとか、親も教師も皆うざい。消えちゃえばいいんだ、全部、ぜんぶ」

五月だけでいい。五月以外みんな消えればいい。

そう呟く弟の声を、兄はきつく目を閉じて聞いていた。

桜木中学と桜木高校は、別の敷地内にある。

とは言っても、歩いて10分もかからない距離だから、両校の交

遊はそれなりにあった。桜木中学の生徒は大抵そのまま桜木高校に進学するので、入試前の説明会とか、一日入学とか、大した用事が無くても親しい先輩に会いに行ったりとか。他の一貫校がどうなのかは知らないけれど、自分たちの通っているところではそういうことが当たり前だった。

だから、五月がいきなり訪ねたりしても、その人は大して驚かなかった。

いつものように微笑みながら、「いらっしやい」と五月を迎え入れてくれた。

「今日は1人なんだな」

<天文学部>とプレートのかかった扉を開けながら、その人が言った。

五月は何も言わずに、こくと頷く。

その人　三杉は、相変わらず折れそうなほど細い腕をそつと伸ばし、五月の両肩をぼんぼんと優しく叩いてくれた。五月に会うたび、三杉はいつもそうする。まるで、ここに居て良いんだと、居場所を与えられているような心地がして、体の力が抜けるのを感じた。

「座れよ。先輩たちは来ないから、楽にしてて」

「…部活、休みなの？」

「うん。もともと帰宅部の暇つぶしみたいなものだったし、部員も俺を含めて3人だけだから」

「少ないね」

「星好きの高校生なんて、今時そんなにいないだろう」

言いながら、三杉は五月の横に椅子を持ってきて腰を下ろした。真正面には座らず、少しだけ間をあけて隣に座る。あまり相手に顔を見られたくなかった五月は、それにかなり安堵した。

三杉は気遣いがうまい。たまに、心の中を見透かされているんじゃないかと思うこともある。

「変わってないよね」

「ん、何が」

「三杉さん、小学校の頃から、ぜんぜん変わってない」

「なにそれ、嫌み？」

「違うよ」

五月はゆるゆると首を振る。懐かしい空気にほっと息をつく。

「なんだか、安心した」

親が同年代だからか、それとも家が近所だからか、天宮家と三杉家はお互い昔から親交が深かった。子どもたちも同じ小学校に通っていたから、特別親しいわけではなくても、それなりに仲良くしていた。

それが、いつからだろう。幼い頃は愛称で呼び合っていたのに、いつのまにか呼び名は「三杉くん」に取って代わり、五月が中学校へ上がってからは「三杉さん」になってしまった。

ほんの二歳差。だが、学生にとっては大きな差だ。

ずっと距離を感じていた。三杉が遠い世界の住人になったような、そんなことを考えていた。

けれどそれは杞憂であつたらしい。三杉は昔と何も変わらない。少し背が伸びて、声が低くなっただけ。細い手足も、優しい表情も、何も変わっていないかった。

たつたそれだけのことに、泣きたくなくなってしまった。

「三杉さん」

「うん？」

「臯月がね、陸上やめちゃったんだ」

「そっか」

「面倒くさい、って。俺と同じ顔して、俺と同じこと言うんだよ。嫌だね、双子って。まるで自分が喋ってるみたいで、何も言えなくなる。臯月の言葉を否定したら、まるで自分を否定したみたいない気持ちになる。だから何も言えないんだ」

「…うん」

「駄目だよ、俺、お兄ちゃんなのに」

お兄ちゃんなのに。間違った方へ進もうとする弟の腕を、引き戻すことすら出来なくて。ずるずる、ずるずると、自分までそちらに引きずり込まれていく。そして、心のどこかでそれを望んでいる自分がいる。

「俺、走ってる臯月が好きだった」

小さく呟いた。

「すごく速いんだ。フォームも綺麗でさ。…俺もスポーツは苦手じゃないけど、むしろ得意な方だけど、でも、臯月ほど綺麗には走れない。だから、嬉しかったんだ。ほら、双子って、何もかも全部そっくりって思われがちでしょ。だから、少しでも違う部分を見つけたら、なんだか珍しくて、新鮮で、ああやっぱり俺達は別々の人間なんだなって、再確認して。それが嬉しいんだ。臯月は臯月で、俺は俺。それでいいんだと、思ったた。ずっと。ずっとそう思ったのに」

言葉が、出てくる。

ぼんぼんと放り出されるみたいに、空気の中へ浮かんでは溶け、浮かんでは溶けて消えていく。それが何だか虚しくて、消えた場所を埋めるように再び言葉を吐き出す。その繰り返し。

でも、不思議と寂しくはなかった。この部屋は暖かかったし、隣には三杉が座っている。何も言わずに座っている。

彼は、五月の方を見ずに、窓の外を眺めていた。

穏やかな横顔。聞いていないようで、ちゃんと聞いてくれている。そんなスタンスが五月を安心させ、同時に恐怖を抱かせもした。このままでは、もっと情けない弱音を吐いてしまう。言葉が止まらなくなってしまう。

「三杉さん」

部室に置いてある、旧式のストーブのせいだろうか。窓硝子は白く曇り、外に広がる銀世界がぼやけていた。

「臯月が壊れる」

静かに、五月は呟いた。

絶望的だった。

「あいつが言うんだ。違うものなんか要らないって。何もかも同じが良いって。じゃなきゃ寂しいとか、当たり前みたいな顔して俺に言うんだ」

また、虚しい言葉がこぼれ落ちた。

「このままじゃ、皐月は駄目になる。俺のせいでも、おかしくなる。言わせちゃいけないかったんだ、あんなこと」

平淡な声。

自分と同じ、彼の声。

五月は目を閉じた。

「…みんな消えれば良いなんて、そんなの、あんなふうに真顔で言っている言葉じゃない」

背中を感じた、弟のぬくもりを思い出す。

“五月だけでいい”

“五月以外みんな消えればいい”

盲目的に慕われて、どうしていいか解らなくなる。

双子は、感情表現が下手だった。というより、表現する必要さえ無いと思っていたから、あえて平静な自分を装っていた。その方が楽だったのだ。わざわざ顔に出さなくても、言葉にしなくても、解ってくれる人間がいる。五月が何を考えているか、皐月はまるで自分のことのように理解してくれたし、同じように五月も皐月の考えていることは何でも見通すことが出来た。2人の間に言葉なんか要らなかった。思いなど伝える必要がなかった。

だからこそ、こんなことになってしまったのだ。

いつも無表情でいるのは、何も感じていないからではなくて、思ったことを顔に出すのが面倒だったからに過ぎない。それに気づかぬ周囲の人間達は、五月と皐月を「ロボットのようだ」と言って揶揄した。それが不快なわけではなかったけれど、自分たちは決して他者に理解されない存在であることを、むざむざ突きつけられるのは寂しかった。

でも、弟は、そんな兄を笑った。
どうして、と。笑ったのだ。

寂しくなんかしないでしよう。五月には俺がいるんだから、他の人間なんか要らないでしょう。

なのに、どうして寂しがるの、と。当然のような顔をして、彼は。
「…可哀想だ」

無機的な声で、五月は言った。

声に感情を込める方法など、とうに忘れた。

「どうしよう、三杉さん。俺と一緒にいたら、皐月は狂ってしまう。俺と一緒にいるために、陸上までやめて、これまで頑張ってきたことも、ぜんぶ捨てちゃって。…変だよ。こんなの、普通の兄弟の関係じゃない」

「五月…」

我慢できなくなったのだろうか。振り向いた三杉が、掠れるような声で名前を呼んだ。

優しい人だと思う。赤の他人のために泣くなんて。

五月は目を閉じた。

「あいつは何も見えなくなってるんだ。俺のせいで、皐月が壊れる。駄目になってしまう。それなのに、俺は…」

かたかたと、風が窓を鳴らす音が、わずかな沈黙を埋める。

心とは裏腹に何の表情も浮かばぬ顔を、両の手のひらで覆い、五月はうなだれた。

「…それを、嬉しいと…」

もしかしたら、先に壊れたのは自分の方だったのかもしれない。自分のために狂っていく弟がどうしようもなく愛しかった。自分しか見えなくなればいいと本気で思った。まるで、母親を独占したがる幼児のように、五月は皐月を独り占めしたかった。

この感情を何と呼ぶのかは知らない。兄弟愛のように純粹なものじゃない。でも、同性である以上、恋愛感情だなんて呼べやしなかった。

ただ一緒にいたい。それだけだ。

小さい頃は、まだそれでも許されていた。何をするのも一緒に歩くときは手を繋いで、夜は同じ布団で眠って。当たり前のように傍にいられた。それが何より幸せで、ずっと、それだけで満足だった。

それなのに。

「キス、したんだ。この前、初めて」
目を細めた。

三杉が自分を凝視しているのが解る。

「あいつが、しようって言うから。ほんの軽い気持ちで、唇を重ねてみた、だけだったんだよ。俺にとっては、ただの遊びの延長。本当にそれだけだった。でも」
戻れなくなってしまった。

あのキスの瞬間。

双子は、普通の兄弟じゃいられなくなった。

キスだけじゃ止まらなくて、相手を押し倒して、それで。

「三杉さん」

声だけが冷静だった。心はもうめちゃくちゃなのに、感情表現を放棄してしまった五月の顔は、相変わらず蠟人形のように冷え切っていた。その、心と体の食い違いが、自分でも痛々しいと感じた。

「臯月がね、俺のこと、好きだって。大好きだって、言うんだ」

「五月、」

「すぐく気持ちよかったって。もう一回しようって。俺、断れなかった。だって、俺も、したかったから」

「五月」

「ねえ、こんなのおかしいよね。気持ち悪いって、思うでしょ。俺はお兄ちゃんなのに。あいつは弟なのに。たぶん俺、臯月にひどいことしたと思う。男同士で、あんな、」

「五月！」

三杉に肩を掴まれる。その華奢な腕のどこに、そんな強い力があ

ったのだろう。ぐいっと引き寄せられ、五月はされるがまま相手の胸に顔を埋めた。

細い胸板だった。けれど、とくんとくんと、規則的な心臓の音が、耳に確かに届いてくる。温かかった。震えた手のひらが、ゆっくりと五月の頭を撫でる。優しい手だと、頭の片隅で、五月はそう思った。

「もういい」

静かに、三杉が言う。

「もういいよ、五月。お前の気持ちは解ったから」

抱きしめられた腕の中で、五月は身動き1つ出来なかった。

「お前は何も悪いことしてない。気持ち悪くなんかないよ。人を好きになるのは、異常なことなんかじゃ、ないから」

人形の頬を、一筋の涙が伝った。

「いいの…?」

「うん」

「俺は、臯月を好きでも、いいの?」

「うん」

「男同士で…兄弟、なのに?」

「いいんだよ。お前が苦しむ必要はない。人を好きになっちゃいけないだなんて、そんな馬鹿な話があるもんか」

「…っ」

その一言に救われた。ずっと背後に付きまとっていた、冷たい氷のような罪悪感が溶けていく。代わりに、弟のぬくもりを再び思い出した。会いたいと、強く思った。

「三杉さん」

「うん」

「じゅめん」

「…ばかだなあ。こういうときは、ありがとっつて言っただよ」

くしゃりと苦笑しながらそう言っつて、三杉はよしよしと五月の頭

を撫でてくれた。

まるで小春日のような人だと、五月は柄にもなくそんなことを考
える。

外にはまだ、冷たい冬の風が吹いていた。

体育祭のひとコマ。(1)(前書き)

本編に入りきらなかった、体育祭のエピソードです。いくつか続く予定です。
下らないネタばかりですが、暇つぶしにどうぞ。

体育祭のひとこま。(1)

エピソード1

「鳴沢君と女の子たち」

「あ…あのっ、鳴沢君…！」
「え？」

それは競技と競技の合間の、休憩時間の出来事だった。

先生に呼ばれて本部へ行った後、陣地へ帰る途中、なぜか数人の女の子達に呼び止められたのだ。

私服姿であるところを見ると、どうやら一般客のようである。

なぜ自分の名前を知っているのかは分からなかったが、おおかた道に迷ったので聞きに来たんだらうと、鳴沢は見当を付けた。桜木高校の敷地内はやたら広いので、トイレに行っただけ元場所へ戻れなくなる人も少なくない。この子たちもきつとそうなのだらう。

「どうしたんですか？ 観客席だったら、あちらの方に…」

「あ、いえ。ち…違うんです」
「へ？」

営業スマイルを浮かべ案内しようとした鳴沢の腕を、女の子の1人がギョツと掴んだ。

きよとんとする鳴沢の前に、女の子たちは揃ってモジモジしながら、おそろおそろといった感じで口を開いた。

「え…えっと…私たち、桜坂女子校の生徒なんですけど…」

「あ、はい」

だから何だというのだらう、と首を傾げながらも、優しい鳴沢は女の子たちの言葉を待ってやる。

そんな相手の態度に勇気づけられたのか、腕を掴んでいた女の子が顔を上げ、まっすぐに鳴沢を見つめてきた。

その顔は、真っ赤だった。

「…それで、その、去年の体育祭も、一般客として見に行ったんです…私たち」

「はあ…それはどうも」

「で…そのときに…偶然…あの、鳴沢君のことを見かけて…」

「え？」

「すつ、すごく、カッコイイな、って思ってた…！」

「…え？」

「私たち皆、鳴沢君のファンなんです！！」

「……え…？」

そのとき鳴沢は、初めて思考停止というものを体験した。渡瀬や桐谷にからかわれた緒方が、よくフリーズしているのを見かけるが、まさか自分までもがそれをやるとは思わなかった。

(えっと。この子たち、今、なんて言ったのかな)

物心付いたときからサッカー三昧で、おまけに思春期のほとんどを男子校で過ごしてきた鳴沢である。

女の子と話すのは初めてではなかったし、手紙の1つや2つくらいなら貰ったこともあるけれど、面と向かって告白(?)をされたのは、実はこれが初めての経験であった。

女の子たちは真つ赤になりながら言葉を続ける。

「あの、鳴沢君は気づいてないかもしれないけど、サッカーの試合にも、何度か応援に行かせてもらったことがあるんです。鳴沢くん、活躍してて、すごいなって…ますます好きになっちゃって」

「鳴沢君って、いつも桐谷君や渡瀬君と一緒にいるでしょう？」

「だから、すごく目立つのよ。私たちの間では、桜木の美形トリオなんて呼ばれてるんだから」

「そうそう。ファンクラブもあるんですよ。…あ、勝手に作って、悪いかなとも思ったけど…でも、我慢できなくて。私たち…その、本当に鳴沢君のこと…す、好きで…応援したいって思ってるから…」

「ほら、桐谷君と渡瀬君って、すごく綺麗だけど、その分なんだか近寄りがたい雰囲気があるでしょう？ でもその点、鳴沢君は親し

みやすいつていうか…優しそうだし…」

「だ、だから今日、思い切って声を掛けてみたんです！ あの…迷惑…でしたか？」

問いかけられ、ハツと我に返った鳴沢は、慌てて首を横に振った。「ぜっ、全然！！ 迷惑だなんてそんな…むしろ嬉しい…です。どうも…ありがとうございます…」

なぜか敬語になってしまう。

女の子たちに負けないくらい、かあっと顔を赤くした鳴沢は、手のひらで口元を覆いながら、照れたように俯いた。

その瞬間。

ずきゅん

(か…かわいいわ！)

(顔が真っ赤…ウブなのね…)

(萌え…！)

(萌えだわ…！)

(超カワイイ)

女の子たちの心臓を、キューピッドの矢が見事に射抜いた。

もちろん当の本人である鳴沢はそのことに気づかず、ただ嬉し恥ずかしい気持ちを堪えるのに必死だった。そんな、少し鈍感な鳴沢の態度が、ますます女の子たちの好感度を跳ね上げる。

やがて我慢しきれなくなったのか、女の子たちは何やら決心した顔で、ズイっと相手に詰め寄った。

「あ、あの、鳴沢君！」

「はっ…ハイ？」

思わず身構える鳴沢。女の子たちが、バツと両手を前に出した。

「…これ、貰ってください！」「…」

「…へっ」

差し出されたのは、手作りのクッキーと、それに添えられた可愛

らしい手紙。

赤いリボンとピンクの包装紙が、なんと女の子らしかった。

「あ、ありが…とう…」

随分と長い間をあけた後、鳴沢がおそろおそろそれを受け取る。

目的を果たした女の子たちは、嬉しそうにキャッキヤとはしゃぎながら走り去っていった。

「…」

暫く放心状態に陥る鳴沢。

周囲のざわめきに置いてけぼりにされ、ただぼんやりと女の子たちが去った方を見つめている。

そんな彼に、後ろからゆっくりと忍び寄る影があった。

「見…ちゃった」

「！」

びくつ、と肩を震わせて振り向く。

鳴沢は大きく目を見開いて、「渡瀬…！」とそこにいた友人の名前を呟いた。

そう。そこにいたのは、よりもよって…。

「涼つてば、モテるんだねえ」

我らが最凶（誤字ではない）の生徒会長であり、鳴沢の頭痛の種ぶつちぎりナンバー1の、渡瀬透であった。

渡瀬はニヤニヤしながら鳴沢の肩に手を置いて、手元を覗き込んでくる。

「遼平ほどじゃないとはいえ、けっこう可愛かったね、さっきの私たち。このクッキーも美味しそうだし」

「ちよっ…勝手に開けるな！」

「いいじゃん減るもんじゃないんだから」

「減る！ お前が触ると何かが減るような気がする！」

「ひどいなあ」

クスクスと笑いながら、渡瀬は鳴沢の首に腕を回して抱きついてきた。

「いや、それにしてもめでたいことだね。彼女いない歴〃年齢の鳴沢クンにも、とうとう春が来たか。友人として心から祝福するよ。おめでとう」

「んなツ…！」

にっこりと無邪気に微笑む渡瀬が、なぜかものすごく嫌な感じに見えて、鳴沢は絶句した。

背中を冷たい汗がたらりと流れる。

しかし対する渡瀬はそんな友人の様子など気づかずに（気づいた上で流しているのかもしれないが）、にこにこしながら体を離してこう言った。

「これは是非とも、皆で御祝いをしなくちゃね！」

「はあ!?!」

「キリヤ、お赤飯〜っ」

「ちよ、やめろ　!?!」

爽やかな秋の空に、鳴沢の叫びがこだました。

体育祭のひとこま。(1)(後書き)

サブタイトルを「純情スカイブルー」にするかどうか本気で迷いました。

うぶな鳴沢先輩もつと書きたい。そして、それを渡瀬におちよくらせたい…。

体育祭のひとこま。(2)(前書き)

本編に入りきらなかった没ネタその2。
閉会式の後の、桐谷先輩と渡瀬会長の話です。

体育祭のひとつま。(2)

エピソード2

〜渡瀬と桐谷〜

「透」

呼び止められて振り向くと、数年来の親友が、なにやら怖い顔をして自分を睨んでいた。

渡瀬は運んでいた用具をそろりと下ろして、

「どうしたの」と首を傾げる。リレーのせいで怪我人続出、よって人手不足になってしまった体育委員会のため、片付けを手伝っている最中だったのだ。

相手の仏頂面には慣れっこだったが、こういきなり睨まれては良い気分がするはずもない。

ふうと溜め息を吐きながら、渡瀬は友の肩に手を置いた。

「そんなに眉間に皺を寄せちゃ駄目だよ、キリヤ。ただでさえ君はあまり目つきがよろしくないんだから」

「うるさい」

一刀両断だ。清々しいほどバツサリ斬られた。

さすがの渡瀬も顔をしかめる。

「…何。機嫌が悪いなあ。せつかくの化けの皮が剥がれかけてるよ、優等生」

「うるさい黙れ」

相手の言葉に耳も貸さず、桐谷は渡瀬の手首をギュッと掴むと、自分の方へと引き寄せた。

顔を覗き込んで、眉間に刻まれた皺をいつそう深くする。

「お前、どうしたんだよ。その顔は」

「え？」

唐突な言葉に、キョトンと目を瞬く。顔？、と首を傾げると、桐谷は「そうだ」と言っただけだ。

渡瀬は怪訝に思いながらも、空いている方の手でぺたぺたと自分の顔を触ってみた。別に、何か変なものが付いているわけではなさそうである。

「そうじゃなくて… ああもう。いいから、こっちに來い」

「え、ちよつと。キリヤ？」

いきなり手を引かれて、転びそうになるのを堪えながら渡瀬は相手の顔を見上げた。身長は、桐谷の方が渡瀬より少し高い。

「何だよ、一体。話なら後にしろよ。今は片付けの最中で…」

「すぐ済む」

「…」

きつぱりと言われ、渡瀬は「しょうがないな」と溜め息を吐いた。

連れて行かれたのはグラウンドの横にある手洗い場だった。

桐谷は手に持っていたタオルを濡らし、じつとしてる、と言って渡瀬の顔を拭いはじめた。

「わっ」

「口の横、血で汚れてるぞ。…切ったのか」

「かすっただけだ」

自分の頬を拭いた白いタオルに、赤黒い染みが浮かんでいる。

渡瀬はそれを見て顔をしかめながら、もう少し優しくしてくれと文句を言った。

「リレーに出れば、これぐらいの怪我は当然だろう。予想範囲内だ。むしろ少ないぐらいだよ。別に、片付けを放り出してまで手当てするほどのものじゃ…」

「痕が残ったらどうする」

「大げさだな。男なんだから、顔に傷があつたつて気にしないよ」
「バカ言え。お前の唯一の長所じゃないか」
「…ひどいなあ」

あまりの言いぐさに、渡瀬は不機嫌そうに眉を寄せる。

しかし桐谷はそんな相手の様子など気にもかけず、こまめにタオルを水で洗って、その顔を丁寧に拭いてやった。

「ほら、できたぞ。あとで薬も塗ってやるから、それまでちゃんと乾かしとけ」

「…君はボクのお母さんか？」

「気色の悪いことを言うな。お前みたいな息子、養育費が貰えなくて育てたくない」

「ああそう」

渡瀬はそっぽを向いて、おざなりに「どうもありがとう」と呟いた。まったく心がこもっていない。棒読みだ。

それでも桐谷は満足そうに「よし」と頷いて、相手の背中をトンと叩いた。

「ばててるなら無理をするなよ、生徒会長」

「ばててないよ、まだ」

2人並んでグラウンドに戻りながら、渡瀬はこう呟いた。

「まだ、始まったばかりなんだから」

桜祭、初日終了。

お祭り騒ぎは、あともう2日間続くのだ。

私立桜木坂大学附属高校

体育祭のひとつま。(2)(後書き)

桐谷先輩は、親友の顔に傷が付くのが我慢できないらしいです。

体育祭のひとこま。(3) (前書き)

藤野さんと桐谷先輩登場。三杉さんが名前とメール文だけ出てきます。

時間帯は特に決めてませんが、おそらく打ち合わせが終わったあたりの話だと思います。あ、ギャグはありません。

体育祭のひとつま。(3)

エピソード3

〈幼馴染みという関係〉

ポケットの中で携帯電話が振動する。

藤野は、隣にいる桐谷に気づかれないうつ、そつと指を滑り込ませてその通信機器を取り出した。

画面に浮かぶのは、三杉馨という人物の名前。メールだ。

“報酬の準備は？”

小さく息をついて、藤野はさり気なく桐谷の傍を離れた。足音や気配を消すのには慣れている。

別に、彼にバレたとしても構わないのだが、相手の機嫌はなるべく損ねない方がよい。

携帯電話をいじっていても目立たない程度まで下がってから、藤野は慣れた手つきでカチカチと返事を打ち始めた。

“万端です。受け渡しはどうしますか？”

絵文字もデコレーションも一切使わない事務的な文である。躊躇いなく、ピ、とそのまま送信ボタンを押した。

送信完了の文字が浮かび、それから暫くは無言になる。藤野はじつと画面を見つめ待っていた。そして再び三杉からの返信。

“M駅に協力者全員を集めておいた”

句読点なしの短文。それを読んで、指定の場所を思い浮かべた藤野は、あることに気がついて目を瞬いた。

（意外と近いわね…。遅くならないように気を遣ってくださいたのかしら）

てっきり、学校から離れたT駅側の方を利用すると思っていたのだが、どうやら藤野の帰宅時間を考慮して場所を選んでくれたらしい。

藤野は、さすが紳士だわとそんなことを考えながら“了解”の返事を打ち、送信した。

送信完了を確認してからケータイをまたポケットに戻し、何食わぬ顔で幼馴染みの隣に戻る。

「宗吾」

「…なんだ」

相変わらず嫌そうな顔で振り向く相手に、藤野はにっこりと笑ってみせた。

「今日も、帰りは送ってくれるのよね？」

「そりやどうせ同じ方向だし…そのつもりだが。どうした？」

「実は私、M駅にちょっと用事が出来てしまったの」

「…だから？」

「私の用事が済むまで、どこかで時間を潰して待っていてくれるかしら」

「なんでだよ」

あからさまに顔をしかめた桐谷は、いまいましそうに舌打ちをした。

「用事があるなら1人で行け。俺は先に帰る」

「あら。私に1人で帰れと言うの？」

「平気だろうお前なら」

とりつく島もない桐谷の様子に、藤野は「もう」と頬をふくらま

せた。

教師や他の大人達の前では優等生ぶって、眉間の皺さえ滅多に浮かべない彼だが、藤野や渡瀬達の前では本来の姿を隠そうとしないのである。

おそらく気を許されている証拠なのだろうけども、こうしょっちゅう睨まれるのは、やはり自分の態度に問題があるのだろうか。藤野はなんとなく思った。もっとも、それに気づいたところで改善する気はさらさら無いのだが。

「宗吾」

少し強めに名前を呼んで、相手の腕に自分の腕を絡めた。逃がすものか。

案の定びしりと硬直した幼馴染みの耳に、藤野は背伸びをしてそつと唇を寄せた。

「あなたのお姉さまに言いつけるわよ？」

「！」

桐谷の顔が色を失くす。

やがて、錆びたブリキのようにぎこちない動作で振り向いた彼は、藤野の顔を目一杯睨みつけてこう呟いた。

「…この性悪女が」

目論見があたった藤野は、ふふふ、と嬉しそうに笑う。

「何とでも言いなさい」

魔王あなたの怒りなんて、私はちっとも怖くないのだから。

体育祭の後に。(前書き)

体育祭終了後、校内に残った三杉と五月の話です。

三杉さんの内面と、戦いを終えた五月の心情を

って見事に失敗。(爆)

…書こうと思

体育祭の後に。

日が沈み、真っ暗になった外の景色とは対照的に、蛍光灯に照らされた室内は煌々と明るい。

細長く設置されたテーブルに腰を下ろしているのは自分だけで、先ほどまで満席だったことを思えば少し寂しいような気がする。

なぜ自分だけがこの人と共に残されたのか、見慣れた生徒会室の天井を見つめながら、五月はぼんやりと考えていた。「話がある」と言って自分を呼び止めた張本人はと言えば、先ほどから窓にかじりつくようにして外を眺めていて、五月の方を見向きもしない。

(三杉さんのこと、ときどき、わからなくなる)

暇つぶしにカチカチと携帯電話をいじりながら、五月は小さくふくと息を吐いた。

てつきり皐月のことで相談に乗ってくれるのかと思っていたのに、相手はその話を切り出す素振りを全く見せない。当てが外れた五月は、じゃあそれならどうして自分はここにいるのだろうと、先ほどから何回も繰り返している疑問をまた自分自身に向けることになった。そんなことをするより本人に呼び止めた理由を問うた方が早いのは解っていたけれど、無言で外を眺める三杉の背中を見ていたら、なんだかそれがどうでもいいことのように思えてくる。

(ああ、もう、わかんないや)

いいかげん考えることにも飽きた五月は、その華奢な背中に、ねえ、と気怠げな声をかけた。

「何が見えるの」

「うん？」

三杉が小さく身じろぎする。しかし振り向くことはせず、目は窓の外に向けたまま五月の言葉に反応した。どうやらよく聞こえなかつたらしく、もう一度言ってくれと促すように、五月の続きを待っている。

そのことに何だか無気力感を覚えつつ、五月はゆっくりと「窓の向こうにだよ」と答えてやった。頬杖をついているから少し喋りにくい。

「外、真っ暗じゃん。何も見えないでしょ。何を見てるの」

「あー、うん」

答えにならない応えを返して、ようやく三杉は振り向いた。表情は特に変化が無く、いつもどおりの、ほわほわした穏やかな微笑みが浮かんでいる。

「ごめん。ちよっと、思い出してたんだ」

「…昔のことを？」

「昔っつーか、去年のこと」

「へえ」

「さつき、花瀬が校門のところに立ってたよ。ここ、遠くまでよく見えるよな」

「え…花瀬さん、来てたの」

「うん」

三杉の笑みが深くなる。

ケータイ閉じるよ、と言われて、五月は素直にパタンと携帯電話を折りたたんだ。それをポケットに仕舞い込みながら、横目で相手の表情を探るように見つめる。

穏やかで、やわらかくて、その実ちつとも本心を悟らせてはくれない。外面的な優しさでコーティングされた心は、その奥で一体どんなことを思っているのか、何一つ相手に教えてはくれないのだ。

「三杉さん、変わったね」

「そうか？」

「昔はもうちよっと可愛げがあったよ」

「そのセリフそのままお前と臯月に返してもいいかな」

「臯月は今でも可愛いけど」

「のろけんな」

初めて三杉の笑顔が崩れた。

眉を寄せながら、やれやれ、と呆れたように肩をすくめる。

「しかも何それ、遠回しに自分のことも褒めてないか？ お前らほとんど同じ顔だろう」

「臯月の方が微妙に目おつきいよ？」

「いや多分それ見分けられる人間そんなにいないから」

「そーかなー」

「そーなの！」

溜め息を吐きながらガタンと椅子をひいて、三杉は五月の隣に腰を下ろした。

気の置けない仲だからか、それとも単に面倒くさいからなのか、先輩が横に座っていても、五月は全く姿勢を正そうとしない。頼杖を崩し、だらーんと机に寄りかかって、もうほとんど突っ伏しているような状態だ。

だが三杉はそれを大して気にせず、むしろ怠そうにしている後輩を氣遣うように、その頭をそつと撫でてやった。もうほとんど条件反射、幼い頃からの癖みたいなものだ。

その感触に目を細めながら、五月は少しだけクスツと笑った。

「三杉さん、慰めてくれるの」

「ばかなこと言うなよ。また臯月に嫉妬されるぞ」

「もうされてるよ。三杉さんが、わざわざ俺と2人きりになろうとするから」

「2人じゃないと話が出来ないだろう」

「どんな話？ そんなに他人には訊かれたくないの？」

「あのなあ……」

語尾を濁し、三杉がこめかみを押さえる。

「…違う。こんなアホらしい会話をするために、お前を残したんじゃないんだよ」

「わかってるよ」

表情を変えずに答えて、五月は相手を見つめた。

「お説教？」

短く問いかけると、三杉はちらりとこちらを見やって、そのあと小さく息をついた。

2人が黙ると、室内は途端に静かになる。遠くでする居残り教師たちの微かな話し声が、よけいに沈黙を際立たせた。先ほどまでは気にならなかつた時計の音まで、やけに明瞭にチクタクチクタクと響きはじめる。

しかし重くはない。面倒くさいとも思わない。

相手の言葉を待つのは苦痛ではなかつた。

多分それは相手が三杉だからなのだろうと、五月はその小さな横顔をじつと見つめて思った。

「なあ五月」

「うん」

「お前さ、本当は迷ってたんだらう？」

「え」

思わず目を瞬き、五月は体を起こした。

相手の言葉を理解するのに通常よりも時間が掛かる。

「…何を」

「俺のために負けること」

につこりと笑って答えた三杉は、ようやく言いたいことがまとまつたと、何だか晴れやかな顔をしていた。

混乱している五月のことなどお構いなしに。

「無自覚なのか、それとも知ってるうえで気づかないふりしてたのか、そのへんはよく解らないけど。でもお前、心のどこかで迷ってただろう。予定通り俺の指示に従うのか、それとも臯月との約束を守るのか」

「何：言ってるの」

五月は眉をひそめて、目の前の先輩をじつと見つめた。

この人の言うことはいつも唐突だ。のんびりと日和見で、他人の弱点なんか興味ありません俺は平和主義ですって顔をしながら、そのくせ時折妙に鋭い。

学年主席は伊達じゃなかったのだと、今更ながらに五月は痛感した。

「馬鹿なこと言わないで、三杉さん。俺は迷ってなかった。あんたに借りを返したんだよ。指示には逆らわなかったし、最後はちゃんと紅組を勝たせた」

「そうだな。お前の意思はどうあれ、結果的にな」

クスクスと三杉が笑う。彼の高校在学時、双子はよく3年生達にからかわれ遊ばれた。今の三杉の表情は、記憶にあるそのときの顔と酷似して…いや、ほとんど重なって見えた。

人の良さそうな顔をして、三杉が言う。

「リレーの最後、お前、本気で走ってただろう？ 緒方君を抜きそ
うな勢いだっただよ」

「それは」

「俺を裏切るかどうかは別にして、勝ちたい、とか思わなかった？」

「…思っていない」

珍しく不機嫌そうに呟いて、五月は相手から目をそらした。

ここ最近、誰かをからかうことはあっても、誰かにかかわれることなんて滅多になかったから、うまくかわすことが出来なかった。

「俺はね、正直すごく意外だったよ。五月が臯月を騙し通すなんて」

「は？」

「てつきり、途中で寝返るか、臯月を自分の方へ引き込むかと思っ
ていたのにな」

「…三杉さん」

無邪気に微笑む三杉に、真っ黒な羽と尖った尻尾がはえたように見える。

五月は顔を歪め、大きな溜め息を吐きながら手のひらに顔を埋めた。

「ひどいや…俺のことも捨て駒だったんだ」

「いや、そんなことないよ」

「それ以外の何だっていうの。つまり、俺が寝返っても別に構わな

「かつたつてことですよ」

「うんまあそれはそうなんだけど」

「イコール捨て駒じゃん」

「あっはっは」

「笑って誤魔化さないで」

手の隙間から横目でちらりと三杉を見やり、五月はなおも恨めしげに続ける。

「…俺の抜けた後は、誰に穴埋めをやらせるつもりだったの」

「渡瀬」

「はあ？」

「紅組勝たせてやるんだから、あいつも利用できないことはないかな、と」

「…馬鹿でしょ。いくら渡瀬会長でも、桐谷先輩相手にそんな不誠実なこと出来るわけ無い」

「そうかな」

「そうだよ」

顔を上げた五月は、仏頂面でなおも三杉を睨み続けた。

涼しい顔で五月に同調するような受け答えをしながら、きつと内心ではやってみなくちゃわからないだろうとか思っているに違いない。いや、絶対にそうだ。そう考えた五月は、なんだか両肩にもろすごい重みを感じた。いつも渡瀬会長に振り回されている鳴沢の気持ちだが、今更ながらに理解できる。こんなときに理解したくないとは思ったが。

五月は溜め息を吐いた。

この人はひどい。ひどい人だ。いやもちろん長い付き合いだしそれくらいのこととはとうの昔に承知していたけれど。

でもやっぱり、今回は本当に酷い。

「…どうしてくれるの。俺、臯月との約束やぶっちゃったんだよ」

「お前が決めたことだろう？」

「そうだけど。でも、」

「言っておくけどな、五月。臯月が怒ってるのは、お前が隠し事してたからとか、約束やぶったからとか、そう言うことだけじゃないと思うぞ」

「…え」

目を瞬いた。わけがわからない。

五月は首をひねり、身を乗り出すようにして三杉の顔を覗き込もうとした。

「それ以外の何があるの」

「わかんないのか？」

「だから訊いてるんじゃない」

「片割れのことなのに解らないのか。意外と鈍いな、お前」

「うるさいな」

気分を害して眉をひそめ、五月は椅子に座り直す。儼然としながら三杉を見やり、先の言葉を促した。

「じゃあ教えてよ。三杉さんは解るの？」

「簡単なことだろ」

三杉がフツと笑う。人前では滅多に見せない表情だ。

がしつと五月の頭を掴んで引き寄せると（けっこう痛い）、彼は笑みをたたえたままこう言った。

「お前が本気になったからだよ」

「…は？」

一瞬、意味が解らず目をぱちくりさせる。

五月は暫く黙り込んで、ようやく相手の言った意味を理解すると、眉間にわずかな皺を寄せた。

それを見た三杉は口元の笑みを消し、ぱつと五月の頭を放したかと思うと、視線をまた窓の方へ向ける。

「緒方…遠平くんだっけ。お前、あの子のこと気に入ってるの？」

「何、それ」

五月の声が険を帯びる。ふざけたことを言うな、と言外に含めて
いるのが分かった。

が、わかったところで、それを気にする三杉ではない。再度につ
こりと微笑んで、不機嫌な後輩の頭をわしゃわしゃと撫でくり回し
た。

「そう怒るな。良い傾向だよ。お前が皐月以外の人間を気にするな
んて、滅多にあることじゃないからな」

「…別に俺、あんな生意気なヤツ、気にしてなんか」

「そうか？ してるように見えたぞ。だから皐月も怒ったんだろう」

「…」

否定したい。

否定したいのに、否定する理由と根拠が見あたらない。

五月は無言で相手の手を払いのけると、そのまま拗ねたように目
をそらした。相手の言葉の正当性を、自分自身の負けを認めたも同
然だった。

三杉はそれを見て、愉快そうにケラケラと笑う。

「まあまあ、そんなに気を落とすなよ。単純な皐月あじのことだ。お前
がキスの1つでもしてやれば、すぐ機嫌直すに決まってるって」

「…三杉さん、ホント性格変わったよね」

「そうか？」

三杉がきよとんと首を傾げたそのとき、ガラリと扉が開く音。

戸締まりにやって来た教師が2人を見つけ、「早く下校しなさい」
と帰宅を促した。

私立桜木坂大学附属高校

体育祭の後に。(後書き)

三杉さんが何を考えているのか、本格的に解らなくなってきました。単なる作者の力量不足なのか、それとも三杉さんが暴走しすぎなだけなのか……もしかしたら両方かな。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3291d/>

私立桜木坂大学附属高校

2008年8月29日18時02分発行